

佐賀弁綺談

高橋 正

昨秋、久留米大学で開かれた国際政治学会に出た序でに、一週間程、九州北半を独り歩きして来た。

久留米は筆者にとって、満更、縁が無い訳ではない。筆者の出た東京・日本橋の有馬小学校——谷崎の『少年』という短編に出て来る——というのは、元もと、久留米藩主、有馬家の江戸下屋敷跡であり、子供の頃、境内で遊んだ町内の水天宮の本社は、ここ久留米の筑後川畔にある。というわけで、学会の合間に参詣したところ、神主に遠来の客として歓迎され、御神酒を振舞われた。

また、人形町の角に久留米屋という呉服屋があつて、子供の時分には、そこで買った久留米絣を着て下町の路地裏を駆け回っていたものである。その誼で、寺町にある久留米絣の創始者、井上伝の墓を訪ねてみたが、今で

も手厚く守られているのには、心む思ひがした。米屋に生れ、機屋に嫁いだでん(伝)女は当節はやりの「自立した女性」の先駆けなどと言うのもおこがましい日本の「三役女房」。今なら、さしずめ、森英恵さんとテイジン、東レの経営者を一緒にしたようなスケールの大きな人間であり、しかもなお女の中の女であつた。

とは言うものの、江戸っ子の筆者には、元もと九州は縁遠い所で、十年程前、船で中国に渡る時、博多に二晩泊まったことがあるだけだから、さながら未知の外国を歩く趣があつた。言葉からしてそうである。九州弁と言つても様々だが、九州訛りの標準語は抑揚が独特で、「センセイ(先生)」が「シェンシェイ」と訛るところなど、むしろ、お隣り韓国の人が話す日本語に近い。

有田で旧鍋島藩の御用簾を覗きに行った時のこと、佐賀弁では「はい」のことを「ない」(実際には、「ナイー」とやや伸ばすようだ)と言うと教わつた。

余所者が佐賀のタバコ屋に立ち寄つて、「タバコをくれ」と所望する。奥から「ない」と声あり、「？」と思つた客がもう一度「タバコくれ」と言うと、出て来た店の者がにっこり笑つて「ない」と言う。「タバコだよ、タバコ」と、業を煮やしてウインドーを指差すと、またしても「ない」と言う返事。怒つた客は「馬鹿にするな」と、買わずに帰つてしまつたと言う。

今では年寄り以外、「はい」を「ない」と言う人もいなくなつたそうだし、まして、なぜ佐賀弁で「はい」を「ない」と言うのか、その訳を知る人もいない。

しかし、筆者の独断と偏見を以てすれば、佐賀弁の「ない」は日本語の「はい」ではなく、韓国・朝鮮語——面倒だから、以後「コリアン」と呼ぶ——の「ネイ」ないし「ネー」(「はい」)に由来する。

古来、半島と九州との繋りが九州と本州のそれに劣らず密であつたことは、言うを待たない。百済王朝と大和朝廷との繋り、渡来人

を介しての大陸・半島文化の流入は史書の教えるところであり、言葉もまた、その例外ではなかった。韓国の学者の中には、万葉集の

意味不明の語句もあちらの古語を援用すれば、立ちどころに判明すると説く人もいる程だが、奈良(ナラ)が実は、コリアンで「国」を意味し、当時のわが国(ウリナラ)から見れば、百済は「大きな国」即ち「クンナラ」であったからこそ、百済(ベクジエ)がわが国では「クダラ」と呼ばれるようになったのである。「クンナラ」が「クダラ」に訛つたのだ。

この他、独り者を意味する俗語の「チョンガー」がコリアンの「チョンガー」に由来すること、「ヒトリ(一人)」、「フタリ(二人)」、「ミタリ(三人)」、「ヨツタリ(四人)」、「タリ」が、「足」を意味するコリアンの「タリ」から来していることも知る人ぞ知るである。「ヒトリ」の「トリ」は「タリ」が訛つたものに他ならない。

古代は知らず、近世においても、北西九州は半島との縁が深い。焼き物にして、文祿・慶長の役(あちらでは、「壬申倭乱」と言う)の際、秀吉の軍勢に連れて来られた半島の陶工達が、この辺りに住み着いて窯を興

し、御陰で、日本の陶磁器は飛躍的にレベルアップした。

こうして出来た有田焼きが最寄りの伊万里の港から、オランダ東インド会社の帆船に積み込まれ、西域の「シルク・ロード」ならぬ南海の「ボースレン・ロード(磁器の道)」を経て西洋に渡り、「オールド・イマリ(古伊万里)」として、今日まで珍重されていることは周知の通りだが、それはまた別の話である。

話序でもう一つ付け加えれば、昨年来の大統領選挙始め、お隣り韓国の情勢に日本の政財界やマスコミがなぜ、あれ程まで神経を尖らせ、騒ぎ立てるのかも納得が行く。日本の対外関係は古代先ず、半島とのそれに始まり、以後今日まで、その重要性は基本的に少しも変わっていないからである。

いずれにせよ、古代や近世の日本には、半島から渡って来た進んだ文化人や技術者がうようよしており、日本人は今と同じように、彼等が持込んだ外来語を積極的に採り入れたのである。

こうした経緯からすれば、佐賀弁の「ない」がコリアンの「ネイ」の訛りであると類推しても、あなたがち牽強附会の説とは言い切れま

い。勿論、だからと言って、筆者は日本語の「はい」そのものがコリアンの「ネイ」から来たとまで強弁するつもりはない。それが罷り通るなら、「いや、日本語の「はい」は広東語の「係(ハイ)」がそのまま入って来たものだ」と言う怪説も立派に成り立つからだ。

ところで、コリアンでは、「ネイ」の反意語は「アニョ」だが、俗に、東洋と西洋ではすべてがあべこべと言われる欧州に、実は「はい」と「いいえ」がコリアンとは全く逆の言葉を持つ国がある。チェコスロバキアがそれで、チェコ語では「イエス」を「アニョ」または「アノ」と言い、「ノー」を「ネイ」と言う。

今秋、韓国ではソウル・オリンピックが開かれるが、これにはスポーツの盛んな東欧諸国も、政治の壁を越えて、多くの選手・役員団を派遣することになっている。その中には当然、チェコの人達も混じっている。彼等が選手村や競技場、そしてソウルの街なかで韓国人と出会った時、果たしてどんなことになるか。佐賀のタバコ屋の珍事そこ退けの椿事が持上がること請合ひである。

それを思うだけでも、ソウル・オリンピックは今から楽しみだ。